

日本文化の由來を研究せんとするものにまつて良い參考書となるであらう。(菊版、1、五〇四頁 價四、二〇、5、四〇六頁、價同上、6、七二四頁 價六、五〇、東京古今書院發行)

●老農渡部斧松翁傳

西岡虎之助著

近時農村問題が頻りに議せられるやうになり、人々が農民の生活、農村の狀態に注意し夫れ等を研究するこゝが次第に多くなつてきたが、其の研究を十分にしやうとするには現在のみならず溯つて過去に於ける夫れ等の狀態を知らなければならぬ。本書は近世に於ける秋田藩の農村開發に偉功のあつた贈從五位渡部斧松翁の傳記であつて、其の關するこゝろ農村及び農民問題の諸方面に亘り、近世の農村の事を知る上に少からず參考となるものである。先づ翁が微賤なる家に生れ常に困苦しながらも絶えず努力して立身を圖つた事より長じて鳥居長根の開墾を企て、あらゆる反對を退け大なる確信を以て之を敢行し、其所に渡部新村を建設した事、天保の飢饉に凶作あるべきこゝを豫知し藩主に獻策して機宜の處置を執ら

しめ其藩並に隣藩を救ふた事、市場を開設して物價の調節を圖つた事、相互扶助、共存共榮を主眼とする村法を制定した事等より更に公人として水利問題救済殖産の諸事業に參劃して顯著なる業績を擧げた事等を述べ、翁が當に秋田藩の老農たるのみならず天下の偉人として推獎に價するものであると結んでゐる。四號活字で通俗を旨としてあるから一般の人々に極めて讀み易い書物である(菊版一〇九頁、東京山喜房發行、價五圓)(以上松野)

●近代 外國關係研究

文學博士 矢野 仁一著

矢野仁一博士が支那近世の政治經濟乃至外交史研究の第一人者なるは今更喋々するまでもない。本書は明清時代に於ける支那と諸外國との外交貿易の變遷を検討せむとする企の第一冊にして、即ちその別名の通りポルトガルを中心させる明清時代の外交貿易の研究である。ポルトガル人のマカオ殖民地開設は當に支那近代史上の重要事件たるのみならず、對日本、對フィリッピン關係を誘致した、然るに東西史料の所傳間々抵牾ありてその眞

相を悉くし難い、支那の外國觀と外國の支那觀とを照應して支那近代外交上の誤解、論争、紛擾、衝突の緣由を研究闡明するは從來未だ何人も企て得ざりし所であるが斯界の權威者の手によりて此の計畫が企てられ、その第一冊の刊行を見るは實に學界の大慶事と謂ふべきである本書は十七章三十三節より成り、その中には既に東亞經濟研究や、史林、外交時報等に發表済のものもあるが、新に稿を起せし部分も甚だ多い。第一章はポルトガル人の支那渡來の由來を述べてマラッカ遠征隊派遣に起筆し第二章にその支那通商の起源の年代を説きて諸説を批判し、第三章にタマン占據時代のポルトガルと支那との關係を述べて、貿易港タマンが大陸より三マイルの地點なることの考定より、支那に派遣されし最初の使節、トメ・ピレス一行の運命に論及し、第四章にシマン・ド・アンドラーデの暴行とポルトガル人の廣東驅逐、第五章に廣東貿易の一時廢絶、第六章にポルトガル人の浙江に於ける通商植民を論述し、以下逐章或はその福建に於ける通商植民、マカオ植民地の由來、マカオ植民地の政治上及び法

律上の地位、マカオの關閑及び支那との劃境問題、青州天主堂燒棄事件、ラザルス・カタネウスの支那帝位覬覦嫌疑事件、兩廣總督戴耀の對策、萬曆時代マカオの日本人驅逐、明代に於けるマカオの貿易と其の繁榮、支那のマカオ抑壓とマカオの衰頹を論じ第十七章に清代ポルトガルと支那との關係を説きては、還海令のマカオに及ぼせる影響、展海令とその影響、康熙五十六年の南洋航海貿易の禁とマカオの一時的復興、ポルトガル人のマカオに於ける治外法權、ポルトガル使節サルダニヤ及びメテルロ、バチエコの北京派遣、乾隆十四年の澳夷善後事宜問題等に及び頁數を費すこと總計五百七十頁、説き去り論じ來り、批判し去り、考證し來りて縷々盡くる所を知らずその要點の詳細は到底茲には紹介致し難いが、當に支那史東洋史の専門家の一讀すべき良書たるのみならず、政治家經濟家等苟くも現代對支政策を考へむとする人士にも他山の石として必ず讀破せられなければならぬ近來の名著であると思ふ。(菊判一冊、價四・五〇 京都市丸太町寺町東、弘文堂書房發行)

●參 考 文 獻
東洋史

及川儀右衛門著

本書は初めて東洋史を學ぶ人々の爲に、東洋人の社會生活の姿、民族活動の傾向、文化の潮流等につき概觀的に記述せむと企てたる著者が、その實際教授の經驗と教育實習の指導より得たる教訓とを參考して編著したるものである。著者の東洋史に對する見解は國史の理解を深める爲に之が必要なりと謂ふのであつて、その見地より編述せられたるものである。全編六編五十七章より成り善く既發表の専門家の論著の要領を包羅集載し卷尾に索引を附して讀者の便に供してある。(菊版六九八頁、價三・〇〇 博文館發行)

●支那文學史概説

文學士 西澤 道寛著

從來の支那文學史に關する論著が學者文人の出卒年次を皇紀又は西曆紀元を以て示せるもの甚だ少きを憾み、又民衆文學即ち戯曲小説の記述少きを慨し、此の二方面の記述に力を加へたもので、全五編二十五章に分類し、その半は戯曲小説の説述に費してある。初學の者には手頃の參考書として好都合である。(菊版三二四頁 價三・五〇 東京市神田區表猿樂町二十四番地 同文社發行)〔以

上 邦 波 〕

●京都帝國大學考古圖錄
文學部陳列館考

京都帝國大學文學部陳列館に藏せられてゐる考古學的標本の主要なるもの數百點を收めて圖錄とするものであつて、去る大正十一年の秋、皇后陛下大學行啓に際し陳列品室の台覽を辱うしたるを機として完成せられた圖錄は僅々數部に過ぎなかつたのこ其後年を閲する數年、蒐集せらるゝもの將に倍加するものがあつた。されば本圖錄は即ち此等の諸品を加へ版を新にし體容を改め、菊版形とし、圖葉百二十を以てされてゐる。内容を三部に分ち第一部日本及朝鮮發見品には石器時代、金石並用時代、原史時代、歴史時代及び朝鮮各時代の遺物を第二部支那發見品には先史時代及漢以前時代漢及六朝時代、唐時代、宋時代及以後とし、第三部諸外國發見品には舊石器時代古代埃及、古代希臘、古代西亞諸國等のものを羅せられてゐる。内容の一々に就いては茲に述べるまでもない此等の資料を通じて本邦始め諸外國の古代遺物に最も簡捷に親しむことが出来るものと云へる。(定價五圓、京都夷川寺町西入、桑名文星堂發行)〔島出〕